

Rising Incidence of Syphilitic Uveitis-Related Hospitalizations in the US

Mir, T. A., Kim, S. J., Fang, W., Harvey, J. & Hinkle, D. M., JAMA ophthalmology 2023 142, 7-14, PMID: 37991790 DOI: :10.1001/jamaophthalmol.2023.53.

アメリカにおける梅毒性ぶどう膜炎関連の入院の増加について

我が国では、1999年4月に梅毒が感染症法上の5類感染症の全数把握対象疾患に定められて以来患者数は増加傾向にあり、2022年には初めて10,000人を突破しました。米国でも同様に梅毒患者数の増加傾向がみられていることを背景とし、この論文では、アメリカで2010年から2019年にかけて梅毒性ぶどう膜炎の加療目的の入院数がどのように変化したかを、全米入院情報抽出データベースをもとに調査した研究結果が報告されています。調査対象の10年間で梅毒性ぶどう膜炎の加療目的の入院は5581件あり、年齢の中央値は45歳、約8割が男性、約2割が後天性免疫不全症候群（AIDS）を合併していたとのことです。医療経済的な側面からも考察されており、梅毒性ぶどう膜炎の入院により調査機関中約4億ドルの費用が発生（外来受診や検査、労働の喪失、生活の質の低下、早期死亡などによる社会への間接的コストは含まれていない）しており、社会面からも梅毒患者数減少が望まれています。年次変化としては、2011年度は人口10万人あたり0.08人の入院患者数であったのが年々増加し2019年度は0.23人まで増加していたこと、地域差はなく全米において同じ傾向であったことが示されており、梅毒性ぶどう膜炎の増加に警鐘を鳴らしています。我が国でも同じく、ぶどう膜炎の診断の際に梅毒性ぶどう膜炎を疑う必要性が増していると思われますので、日々の診療において気を付けたいと思います。

（担当者： 近畿大 岩橋 千春）